慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾の中国語教育における高大連携(2) : 既習者クラスの教科書について
Sub Title	University-high school collaboration in Chinese language education of Keio Gijuku (part II) : exploring textbooks for students with knowledge of Chinese language
Author	須山, 哲治(Suyama, Tetsuji) 荻野, 友範(Ogino, Tomonori) 山下, 一夫(Yamashita, Kazuo) 吉川, 龍生(Yoshikawa, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.14, (2017.) ,p.69- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20170000-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾の中国語教育における高大連携（2）

―― 既習者クラスの教科書について

須　山　哲　治
荻　野　友　範
山　下　一　夫
吉　川　龍　生

一、はじめに

大学生が必修科目として外国語を履修する際、英語以外の言語については、当該言語に初めて触れる学生が大半である。しかし、中には何らかの形で大学入学前に当該言語を学んだ経験を持ついわゆる「既習者」も、未習者に比べれば少数ではあるが毎年一定数存在する。

前稿では、慶應義塾大学入学時における中国語の既習者について、以下の４種の存在を指摘した[i]。

1　一貫教育校[ii]で中国語の授業を履修した者
2　一貫教育校以外の高等学校、あるいはそれに相当する国内外の後期中等教育学校で中国語の授業を履修した者
3　専修学校・市民講座・放送講座などで中国語を学習した者
4　中国語母語・準母語話者（いわゆる「ネイティブ」「ニア・ネイティブ」）[iii]

本稿では、上記分類に該当する学生を、それぞれ「既習者１」「既習者２」のように呼称する。

さらに前稿では、これら中国語既習者をめぐるさまざまな問題について、慶應義塾の一貫教育校・大学の中国語担当教員の有志で構成される「慶應義塾全塾中国語担当者懇談会」（以下、全塾懇談会）における取り組みを中心に、幾つかの考察をした。しかし前稿では、紙幅の関係もあって既習者クラスの使用教材については取り上げることができなかった。

そこで本稿では、2017年６月27日に開催された第７回全塾懇談会[iv]での議論を基に、この問題について検討してみたい。なお前稿同様、本稿は全塾懇談会の許可を得た上で執筆者が個人の感想ないし見解を述べるもので、内容についても全塾懇談会ではなく、執筆者が責任を負うものであることを諒解されたい。

二、各学部既習クラスの教材

まず以下に、各学部の中国語必修科目既習クラスで採用されている教科書を挙げる。なお、英語とその他の外国語を同列に扱う外国語必修選択制度を持つ総合政策学部・環境情報学部、中国語が第二外国語選択必修制度の中に設定されていない医学部、第二外国語選択必修制度そのものを持たない看護医療学部・薬学部については、ここでは取り上げない。また、各学部の中国語必修科目の詳細については前稿を参照されたい。

(1) 文学部

● 1年生中級

① 日本語母語話者教員[v]クラス

杉野元子・黄漢青、『大学生のための初級中国語40回』、白帝社、2010年

吉田泰謙・相原里美・葛婧、『知っておきたい中国事情』、白水社、2014年

② 中国語母語話者教員クラス[vi]

村上公一（監修）、『快楽学漢語・説漢語（準中級）』、早稲田大学アカデミックソリューション、2013年

※前掲の既習者1～3を受講者の中心とする。受講者は①と②あわせて週3コマ分を履修するため、上記3冊をすべて学習。

● 1年生上級

文章翻訳や作文・聴解・会話などのプリント

※既習者4が中心で、外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」と同一科目。

● 2年生上級

① 日本語母語話者教員クラス

文章翻訳を中心とするプリント

② 中国語母語話者教員クラス

会話・聴解を中心とするプリント

※1年生中級を履修した既習者1～3が中心。受講者は①と②の両方を履修することもできるし、どちらか片方のみを履修し、もう1コマは2年生中級のクラスを履修することも可能。

● 2年生最上級

作文・聴解・会話などのプリント

※1年生上級を履修した既習者4が中心で、外国語教育研究センター三田キャンパス設置科目「中国語表現技法」と同一科目。

（2）経済学部

● 1年生Aクラス

羅奇祥・仲川麻衣子、『初めての中国語―実用編』、駿河台出版社、2009年

劉穎・小澤正人・柴森、『二冊目の中国語　講読クラス』、白水社、2012年

吉田泰謙・相原里美・葛婧、『知っておきたい中国事情』、白水社、2014年

● 1年生Bクラス

車麗、『思いっきり中国語　听一听　写一写　说一说』、同学社、2016年

尹景春・竹島毅、『新版中国語さらなる一歩』、白水社、2002年

本間由香利・蘇紅、『中国語的おもてなし―“问答”ペアワークで会話練習』、郁文堂、2017年

※既習者1を高等学校で2年間の学習歴を有する履修者（Aクラス）と1年間の履修者（Bクラス）に分け、既習者2～4もレベルに応じてどちらかのクラスに配分。各クラスは週3コマで3冊すべてを学習。また、統一教材として吉川龍生・宇振領・千田大介・長堀祐造・根岸宗一郎・溝部良恵編『例文で覚える中国語基本単語3000』（慶應義塾大学出版会、2015年）も学ぶ。なお2年生～4年生はAクラス・Bクラスの別がなくなり、受講者は自らのレベルに合った授業を選択。

（3）法学部

● 1年生既習者クラス

黄漢青・杉野元子、『大学生のための現代中国12話Ⅲ』、白帝社、2013年

※既習者1が中心。多くのクラスを設定しており、それぞれのクラスで異なる教科書を採用しているが、ここでは代表的なもののみ挙げた。一部の既習者4については外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」の履修を推奨。

● 2年生既習者クラス

三潴正道・陳祖蓓、『時事中国語の教科書2017年度版』、朝日出版社、2017年

※1年生既習者クラスを履修した既習者1が中心。多くのクラスを設定しており、それぞれ異なる教科書を採用しているが、ここでは代表的なもののみ挙げた。一部の既習者4については外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」の履修を推奨。

（4）商学部

● 1年生中国語インテンシブ

山下一夫・川浩二・廉舒、『おとなりは中国人第2版』、好文出版、2014年

● ２年生中国語インテンシブ

姜麗萍（主編）、『STANDARD COURSE―中国語の世界標準テキスト―４上（中級レベル）』、スプリックス、2015年

※既習者クラスは設置していないため、１年生既習者１～４については、レベルに応じて１年生中国語インテンシブ（通常クラスが週２コマであるのに対して、日本語母語話者教員２コマ・中国語母語話者教員１コマの週３コマで行う集中授業）・２年生中国語インテンシブ（本来は１年生中国語インテンシブに接続し、やはり日本語母語話者教員２コマ・中国語母語話者教員１コマの週３コマで行う集中授業）・外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」の履修を推奨。

(5) 理工学部

● １年生既習クラス

中国語の並木道編集部会、『中国語の並木道［改訂版］』、白帝社、2011年

王亜新・劉素英、『学ぶ中国語　初中級編』、朝日出版社、2016年

※既習者１～３が中心で、まず前者の未習者クラスで用いる教科書で初級の復習をした後、後者の教科書を学習。既習者４については必修外国語科目として中国語を履修しないよう求め、自主的に選択科目として外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」を履修するよう推奨。

三、高大連携

本稿冒頭でも触れたとおり、上記の各学部既習者クラスでは、既習者１の人数が最も多いため、各学部は当然ながら、各一貫教育校の使用教材を意識している。全塾懇談会における情報交換も、大学側担当者は一貫教育校でどのような教科書が用いられているか、また一貫教育校側担当者も大学でどのような教科書に接続していくのかが、大きな関心事となっている。

以下に、2017年度における一貫教育校の使用教材を挙げる。なお一貫教育校からの大学進学者の人数は慶應義塾高等学校出身者が最も多いため、既習者１の中でも、同校の出身者が最大の勢力となる。なお慶應義塾志木高等学校でも中国語の授業が設置されているが、年度後半の半年のみの開講であり、また原稿執筆時点で2017年度の教材が確定していないため、今回は省略した。ちなみに、一貫教育校の段階でも既習者（特に中国語母語話者・準母語話者）は存在するが、特に既習者クラスのようなものは設定されていない。

（1）慶應義塾高等学校

●第２学年

杉野元子・黄漢青、『大学生のための初級中国語40回』、白帝社、2010年

●第３学年

杉野元子・黄漢青、『大学生のための初級中国語24回』、白帝社、2011年

※第３学年では、第２学年において中国語を学習した生徒を対象としたクラスと、第３学年から新たに中国語の学習を始めるクラスが設定されているが、現状では前者のみが開講。第２学年と第３学年とで教科書が異なるのは、前年度の第２学年で採用された『大学生のための初級中国語24回』を第３学年でも継続して学習しているため。第３学年の授業では、さらに補助教材としてプリントなども使用。

（2）慶應義塾女子高等学校

●第２学年

中国語の並木道編集部会、『中国語の並木道［改訂版］』、白帝社、2011年

●第３学年

中国語の並木道編集部会、『中国語の並木道［改訂版］』、白帝社、2011年

劉穎、『２年生のコミュニケーション中国語』、白水社、2002年

※『中国語の並木道［改訂版］』は、第２学年から始め、第３学年まで使用。第３学年ではさらに週１回、『２年生のコミュニケーション中国語』も用いる。

（3）慶應義塾湘南藤沢高等部

●第３学年

竹島毅・趙昕、『さあ、中国語を学ぼう！―会話・講読―』、白水社、2015年

尹景春・竹島毅、『最新２訂版　中国語はじめの一歩』、白水社、2012年

※文系週２回クラスで前者を、理系週１回クラスで後者を使用。

（4）慶應義塾ニューヨーク学院

●第２学年・第３学年

Tao-chung Yao ほか、『中文听说读写 Integrated Chinese』Level1（Part1）』、Cheng & Tsui Company、2008年

Tao-chung Yao ほか、『中文听说读写 Integrated Chinese』Level1（Part2）』、Cheng & Tsui Company、2008年

※上記テキストを２年間かけて学習する。

さて、外国語の教科書の進度について検討する際、一般に想定されるのは発音・語彙・文法などの項目であろう。ただ中国語教育の場合、発音指導については入門の段階で〈汉语拼音方案〉に則って行うことがほぼ定式化しているため[vii]、受講者個々の出来・不出来はともかく、入門段階が終了した時点で系統的な学習は終えていると見なすことが一般的である。習得語彙については教科書によってかなりのばらつきがあるが、本来は客観的な指標となるはずの新HSK大綱単語があまりあてにならないという問題もあり[viii]、現状では教員間で共有できる判断基準に乏しい。

一方、文法については、杨寄洲（2000）、杨德峰（2001）、吕文华（2002）などの議論を経て、国家对外汉语教学领导小组办公室（2002）で一応の完成を見た、初級の段階で学ぶべき項目についてのコンセンサスが得られている。上記の一貫教育校で採用されている教科書は、おおむねこれに沿ったものだと言えるため、大学側の担当者は既習者１がこれらの文法事項を学習し終えたものと見なしている。

無論、既習者だからといって、無条件に大学の既習者クラスに配分するわけではない。学部によって方式は異なるが、いずれも該当者に対して面談や選考などの形で、既習者クラスで学ぶことが妥当か否かの判断を下しており、それは既習者２～４についても同様である。こうしたきめの細かい指導が成り立っているのは、各学部に中国語専任者がいるという、現在の慶應義塾の制度が基にある。大学によっては語学教育を特定のセンターに一元化しているところもあるが、少なくとも慶應義塾においては、そうしたシステムでは現在の既習者教育は成立しなくなると言えよう。

一方で、「高大連携」がいわば文法事項中心となっている現状については議論の余地があるかも知れない。教員が文法事項を網羅することばかりに気を取られた結果、受講者は確かに文法を「覚えさせられた」が、簡単な表現も聞き取れず、また話すこともできないという話は、中国語に限らず、多くの外国語学習で耳にすることである。現在、外国語教育研究の分野では、従来型の文法・構造シラバスから、「何ができるか」というCan-doの視点に基づく概念・機能シラバスへの転換が説かれている[ix]。現段階では、塾の中国語教育においてこうした概念・機能シラバスの導入はあまりなされていない状況だが、今後はそうした方向に展開していく可能性もありうる[x]。こうした問題は、今後全塾懇談会でも議題として扱っていくべきかも知れない。

さて、大学側の既習クラスのあり方を使用教材から見た場合、既習者１～３については以下の数種類に対応が分かれている。

① 「初級テキスト」（上で見た初修文法事項を網羅した教材）ではなく、「初中級テキスト」ないしは「中級テキスト」（「初級テキスト」の次の段階の教材）を使用

② 「初級テキスト」の教材を使用して初級文法の復習を行ってから、次の段階の「中級テキスト」を使用
③ 既習者に未習者向けの集中学習コースを受講させ、「初級テキスト」と「中級テキスト」を連続して使用

また「中級テキスト」については、講読主体のもの、会話主体のもの、講読・会話の両方を行うもの、初級から講読・会話への橋渡しをするもの（いわゆる「初中級テキスト」）などに分かれている。これは各学部における教育方針の違いや、３年生以降の選択科目・専門科目との接続を反映している。これは逆に言えば、学部によって中国語のニーズが異なるということでもあり、先に触れた「語学センター化」が慶應義塾には馴染まないことを示してもいる。

四、母語話者・準母語話者

さて、各学部における既習者４の母語話者・准母語話者向けの授業を見ると、いずれも特定の教科書を使用しておらず、「プリント配付」となっている。これは、教室で中国語を学んだわけではない者が多数を占める既習者４に対しては、担当者が既存の教科書の枠にとらわれず個々に目標を設定してカスタマイズする必要があることを意味している。

既習者４を中心とした授業は学内で複数開講されているが、以下に外国語教育研究センター日吉キャンパス設置科目「中国語表現技法」の中から、本稿の共同執筆者の１人が2017年度前半期に担当した科目を取り上げ、配付したプリントや授業の進め方などについて考えてみたい。

この科目は、一定の中国語能力を持つ学部生であれば誰でも選択科目として履修することができるほか、幾つかの学部では、既習者４などを対象として１年生の第二外国語必修科目の単位に振り替えている。これは、受講者数の問題などで、学部独自で既習者４を対象としたクラスを設置するのが難しいからである。逆に考えれば、こうした科目の開設は、「各学部の外国語教育を補完するために多彩な外国語科目を設置する」ことを旨とするセンターの特性を存分に生かしたものといえる[xi]。

受講者は13名で、既習者４の範疇となる、中国在住経験を持つ者・親族に中国語話者がいる者などが大半である。受講者はいずれも中国語・日本語ともに一定以上の運用能力を有するが、一方で学習者個々のレベルのばらつきも大きい。

教材は以下の簡体字中国語による論説文を使用し、担当となった受講者が事前に日本語訳を作り、授業では受講者全体でそれを検討する。

・ 余志冲、吴达、〈临时工背对镜头〉、《人物》2013年９期、北京：人民出版社、pp.117−118

・ 章念生、〈中美友好、根基在民众〉、《人民日报》2017年４月３日、北京：人民日报社、第３版
・ 许晓、马驰骋、〈正统美人〉、《人物》2013年10期、北京：人民出版社、pp.86−91
・ 周作人、〈谈鲁迅〉、《周作人散文全集》第７卷、桂林：广西师范大学出版社、2009年、pp.365−366

コミュニケーション能力が喧伝されている現在、このような訳読教授法は「時代遅れ」かも知れない。しかし、中国語母語話者・準母語話者の多くは、会話はある程度できるものの、年齢相応の「国語力」（中国語による論理的読解力・日本語による論理的表現力など）や「書面での翻訳」が不充分である。当人たちが「中国語の学習」として期待する内容も、そうした点の補強であることが多く、それはまた既習者４の受講生たちが大学卒業後も、研究・仕事等の社会生活上で求められていく能力でもある。実際、今回の受講者たちも、全体的に非常に意欲的に取り組んでいる。上述の通り、受講者はみな一定程度以上の中国語の能力を有している。その彼らが敢えて「中国語」の授業を履修し、意欲的に取り組むのは、将来中国語を活かして活躍したいという比較的明確な目的意識を持っていることが理由のひとつとしてあげられよう。

中国語の論理的な文章を日本語で厳密に解釈する授業は、日本語教育の課程で行われるべきだと考える向きもあろう。しかし、例えば日本語・日本文化教育センターが提供している日本語の授業は、中国語以外にさまざまな言語の母語話者が受講するため、当然のことながらこの種の科目は開設されていない。さらに、「中国語表現技法」の受講者は、別科・日本語研修課程の学生などとは異なり、日本語による試験を経て入学して来ているため、例えば「テニヲハ」の修正に必要以上の時間を取られるわけではない。以上のことから、既習者４のニーズを埋められる科目は「中国語表現技法」をおいて他にないと言えよう。

一方でもちろん課題もある。上述のように、受講者の中国語・日本語の獲得状況に差が存在するが、そのために生じる問題を２、３取り上げたい。まず、学習者がどの漢字体（簡体字・繁体字・その他）に慣れているかということがある。現在、日本の中国語教育ではおおむね中国大陸の中国語（普通话）がスタンダードであり、中国語の授業における使用文字も通常、簡体字である。だが、受講者の中には、台湾正字（いわゆる「繁体字」）を通して中国語を獲得している者も存在する。いずれの漢字を使用しても「中国語」であることに変わりはないが、授業ではいずれかの字体の教材を選択せざるを得ない。これは受講者にとっても重要な問題となっており、事実、学期当初のガイダンスの際に受講希望者からは、教材は簡体字か、繁体字かという質問が複数寄せられる。また、訳読式の授業とはいえ、中国語の発音が問題になる場合がある。その際、中国語の発音を大陸式の発音記号であるピンインで習得したか、台湾式の

発音記号である注音符号で習得したか、あるいはそもそも発音の表記自体を特に意識せずに中国語の音を習得したか、などという習得状況の相違に起因する問題も生じる。さらには、例えば難解な語彙や新語を翻訳する際にも、受講者間で中国語・日本語両者の語感の受け止め方が相違するため、訳語の選択が問題になる場合もある。これらの問題は、言語的背景が異なる受講生が集まって来る以上仕方の無いことではあるが、少なくとも台湾正字や注音符号に慣れた学生の存在は、考慮に入れておかなければならない。

台湾正字に慣れた学習者にとっても、中国大陸で用いられている簡体字を習得することは、実用性を考えれば大きな意義があるが、では学習者に対してどのようにそれを教えていくのかという具体的な方法論は、まだ確立されていない。また、ピンインについては、すでに習得している受講者とのバランスを考えると、注音符号に慣れた学習者にピンインを教えることに大きな時間を割くことには躊躇される面もある。台湾で出版されている注音符号・台湾正字の辞書の使用を勧めるというのも１つの手だが[xii]、これとて根本的な解決にはなりえない。さらには、大陸の「普通话」と台湾の「國語」とでは、発音や語彙にある程度の差異があるので、逆に簡体字・ピンイン学習者に対して繁体字・台湾「國語」を教授する必要があるかもしれない。こうした問題については今後も検討して行く必要があるだろう[xiii]。

五、おわりに

以上，第７回全塾懇談会における議論や資料を基に，慶應義塾における中国語既習者クラスの教材について検討してきた。通常，学校で実際に採用されている教科書の内容や，教科書選定の妥当性について議論されることは少ない。本稿で示した慶應義塾における取り組みも，まだ多くの改善の余地があるが，ひとまずは現状を報告することで，大学における中国語既習者，特に中国語母語話者・準母語話者について，同様の問題意識を持つ教育者・研究者の参考に資することができれば幸いである。

参考文献

植松茂男（2006）、『英語学習と臨界期―第２言語習得研究と帰国生教育から』、東京：松柏社、202p。

公益財団法人国際文化フォーラム（2013）、『外国語学習のめやす　高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』、東京：公益財団法人国際文化フォーラム、113p。

佐藤郡衛（2010）、『異文化間教育―文化間移動と子どもの教育―』、東京：明石書店、216p。

サンドラ＝サヴィニョン（2016）、『〈増補新版〉コミュニケーション能力』、草野ハベル清子ほか訳、東京：法政大学出版局、358p。

須山哲治・山下一夫・吉川龍生（2017）、「慶應義塾の中国語教育における高大連携（1）：全塾懇談会の理念と既習者の扱い」、『慶應義塾　外国語教育研究』第13号、東京：慶應義塾大学外国語教育研究センター、pp.153−161。

千田大介（2013）、「新 HSK 大綱単語の性質について―国内教科書・５級過去問の単語統計を通じて」、『漢字文献情報処理研究』第14号、東京：好文出版、pp.8−20。

文部科学省（2010）、『高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編』、東京：開隆堂出版、122p。

国家对外汉语教学领导小组办公室（2002）、《高等学校外国留学生汉语言专业教学大纲》、北京：北京语言文化大学出版社、768p。

吕文华（2002）、〈对外汉语教材语法项目排序的原则及策略〉、《世界汉语教学》2002年第４期、北京：北京语言大学、pp.86−95。

孙德金（2006）、《对外汉语语音及语音教学研究》、北京：商务印书馆、450p。

杨德峰（2001）、〈初级汉语教材语法点的确定、编排中存在的问题〉、《世界汉语教学》2001年第２期、北京：北京语言文化大学、pp.81−88。

杨寄洲（2000）、〈对外汉语教学初级阶段语法项目的排序问题〉、《语言教学与研究》2000年第３期、北京：北京语言文化大学、pp.9−14。

注

[i] 須山哲治・山下一夫・吉川龍生（2017）。

[ii] 一貫教育校とは、慶應義塾の中で初等教育・前期中等教育・後期中等教育を担当する学校を指す。

[iii] もちろんこの４者は截然と分かれるわけではない。例えば、１の学習者が３を兼ねることもあるし、４の母語話者・準母語話者が２を兼ねることもある。

[iv] 18：30～20：30、於日吉キャンパス来往舎 2F 大会議室。なお第１回から第６回までの懇談会については、須山哲治・山下一夫・吉川龍生（2017）、p.153を参照。

[v] おおむね日本語を母語とし、中国語は教室における学習によって獲得した教員を指す表現として用いる。授業では、日本語による説明や、日本語母語話者の立場からの説明が期待されている。一般には日本人教員と称されている。

[vi] おおむね中国語を母語とし、日本語は教室における学習によって獲得した教員を指す表現として用いる。授業では、中国語のネイティブ・スピーカーとしての役割を期待されている。一般にはネイティブ教員と称されている。

[vii] この問題については孫德金（2006）を参照。

[viii] この問題については千田大介（2013）を参照。

[ix] 文部科学省（2010）、サンドラ＝サヴィニョン（2016）などを参照。

[x] 公益財団法人国際文化フォーラム（2013）など。

[xi] 慶應義塾大学外国語教育研究センターウェブサイト（http://www.flang.keio.ac.jp/modules/tinyd0/index.php?id=584）、2017年８月29日閲覧。

[xii] 注音符号配列の台湾正字の中日辞典としては『中日大辭典』（于長敏主編、台北：五南圖書公司、2008年）、日中辞典としては『修訂新版新時代日漢辭典』（陳伯陶監修、台北：大新書局、2001年）などが挙げられる。

[xiii] なお、母語話者・準母語話者への授業設計や教材の問題については、帰国子女についての英語教育の分野での研究や、異文化間教育の視点での研究なども参照することで、今後より議論を深めてゆくことも可能だと思われる。植松茂男（2006）、佐藤郡衛（2010）などを参照。